

# 1 自己評価及び外部評価結果

(別紙4)

## 【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	2470800489		
法人名	社会福祉法人 慈恵会		
事業所名	グループホーム正邦苑城田		
所在地	三重県伊勢市中須町402		
自己評価作成日	令和5年9月25日	評価結果市町提出日	

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaiyokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&amp;ligvsoyoCd=2470800489-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kaiyokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&amp;ligvsoyoCd=2470800489-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

## 【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会		
所在地	津市桜橋2丁目131		
訪問調査日	令和5年10月16日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

入居者一人ひとりの生活リズムを把握し、日頃の様子や性格等から個別支援ができるよう努めています。生活歴・職歴などから、共同生活での役割や楽しみを作り出す働きかけを意識して取り組んでいます。また、最後まで「自分らしく」過ごしてほしいと考えており、重度化や終末期を支えることができるよう日頃から家族や医療機関との連携を図り、入居者を共に支える関係の構築に努めています。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

事業所の前方には田園風景が広がり、伊勢の山並みも一望でき、落ち着いた環境の中に立地し、開設21年目である。今年度はコロナ感染症が5類に移行したとはいえ、感染症対策を取りながら、近隣への散歩に出かけ、馴染みの方や地域住民の方との交流もあり、利用者の気分転換もできる恵まれた環境にある。また理念を常に心掛け、利用者一人ひとりが出来る事、やりたい事に添った普通の暮らしを大切にす支援を心がけていることは、利用者の表情や会話から感じ取れた。地域の方々から認知症の相談を受けたり、介護サービスの利用相談を受ける事もあり、今後も地域の拠りどころとして、ますます期待される事業所である。

## V. サービスの成果に関する項目（アウトカム項目） ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目：23, 24, 25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目：9, 10, 19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目：18, 38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目：2, 20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目：38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目：4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目：36, 37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目：11, 12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目：49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目：30, 31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目：28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員全員でつくり上げた理念をよく見える場所に掲示し、具体化していくことを意識して取り組んでいる。	職員全員でつくり上げた理念を、全職員が共有し、利用者が持てる力を、大切にしながら穏やかな介護を実践している。一人ひとりの思いに寄り添い、普通の暮らしが出来るような支援を心がけている事は、利用者や職員の行動や会話から感じられた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の行事の参加や老人会や保育園の皆さんには当苑の行事に参加してもらっていたが、現在はコロナ禍の為中止している。災害時の避難体制について、自治体と連絡を取り合っている。	今までコロナ禍で地域との付き合いは少なかったが、夏祭りに饅頭をもらったりと、長年の交流から基盤は出来ている。コロナウイルスも5類に移行した昨今は、近隣散歩時に地域の方々と挨拶を交わしたり、日常的に交流が出来る様になりつつある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方々から認知症の相談や介護サービスの利用方法などの相談も受け付けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は前年度は書面で行っていたが、今年度からは当苑で開催している。事業所の報告、出席者等の意見や要望を聞き、サービスの質の向上に繋げていけるよう取り組んでいる。	コロナ禍で書面での開催とし事業所の取り組みや情報を通信と共に構成員に郵送し、意見を貰っていた。本年5月からは事業所で開催し、面会の件、洪水時の避難確保計画の件等いろいろと貴重な意見交換が対面で出来た。BCPIについても参加者と話し合えた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	各種書類の提出や手続き、生活支援についての相談を行ったりしながら、協力関係が築けるよう取り組んでいる。	コロナ禍で電話での話し合いであったが、今までの関係性は築かれている。介護保険の情報や介護相談員の件等相談したりと、連携は保たれている。伊勢市の事業者連絡会とは、積極的な連携に取り組んでいる。市とも日頃から連携を図っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	勉強会を行ない、職員全員が共通意識を持ち、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。玄関の施錠については、職員の手薄な時間帯のみ施錠している。	身体拘束適正化委員会は3カ月毎に開催している。社内研修において「身体拘束につながる行為はないか？」と、常に検討することで身体拘束を適正化する全職員の意識は高い。BCPファイルの整理もできつつある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連法について内部研修で職員全員が学ぶ機会を持ち、一人ひとりが責任を自覚し、虐待防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	内部研修会にて入居者の自立や尊厳、権利などについて考える機会を設け、同時に制度について学ぶ機会を持っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前に十分な説明を行い契約をしている。重要事項に変更が生じた際は、書面で変更内容を説明し、理解・納得を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議にて、意見・要望を表せる機会を設けている。また、毎月利用者の様子や行事報告、行事予定を「おたより」にて発行し、伝えている。	コロナ禍で面会制限もあり電話で要望を聞くことが多かった。家族の希望により利用者の事業所での写真を「おたより」に掲載し、喜ばれている。家族とは些細な事でも相談してもらう機会を持つようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者との面談やアンケート、会議等において、職員が気軽に意見を表せる機会を設けている。	毎月の職員会議や日常の業務の中で職員の意見や提案を聞き気楽に話し合える環境にある。代表者と年2回の面談やアンケートから体温計や空気清浄機を購入できた。法人内研修も定期的に行い、職員の希望で研修に参加する事もある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回の人事考課を実施している。また、各自が向上心を持って働けるよう法人内研修を定期的に行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個々のスキルアップや資格取得のために、勉強会や研修会を開催している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市内のサービス事業者連絡会に所属しており、相互交流、連携に努めている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用の相談があった際は、必ず本人に会い、心身の状況や本人の意向を聴き、少しでも早く他の入居者や職員との信頼関係が築けていけるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談時に家族が悩んでいる事や困っている事を聴き、事業所としてどこまで対応できるかなど、事前に話し合いをしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時、本人や家族の思いや状況を確認し、改善に向けて支援の提案や他のサービス利用も含めた対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	同じ時間を共に過ごすことを意識し、入居者のできることやできそうなことから、食事作りや掃除など、共同生活の中での役割として、一緒にできることは協働している。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時や介護計画の評価時には、入居者の普段の様子などを報告し、情報交換を行っている。また、入居者の状態に変化があった時は、家族に連絡し、情報を共有することで協力関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍の為、外出や面会を最小限にしているが、その時の状況により入居者の馴染みの場所へ行くよう支援している。	コロナ禍で面会制限や外出制限があった為、人や場との馴染の関係継続はほとんどできなかったが、かかりつけ医への通院や買い物等で馴染みの関係は継続できた。利用者の「自宅を見たい、帰りたい」との希望発言に答える支援が出来た。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係に配慮し、孤立してしまわないように、入居者同士が協同して活動する場面作りに配慮している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	連絡を取るなど、利用が終了しても関係が維持できるように努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の会話の中からそれとなく確認したり、生活の様子から把握に努めている。困難な場合は、家族等からの情報を得るようにし、本人の立場に立って検討している。	何気なく利用者が発するひと言や利用者同士の話に職員は、耳を傾けて本人の思いを知るように心がけている。その日の表情や会話からも希望や意向を把握するように努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に本人や家族からこれまでの暮らしについて聞き取るようにしている。また、入居後も本人のお話や面会者などから聞き取り、把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員間の申し送りや記録を活用し共有を図っている。また、小さなことでも気になる事、統一したい事、注意していく点などがあれば「トゥディミーティング」にて話し合い共有・把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族には、日々の関わりの中で思いや意見を聞き、介護計画の中に反映させるようにしている。また、職員全員で本人のできること・できそうなことに着目し、介護計画に活かしている。	各ユニットで毎月開催される職員会議やチームケア会議で問題点（援助内容、本人の状態や気分の変動など）を話し合い、3カ月毎にモニタリングをしている。基本3カ月で短期目標を、12ヶ月で長期目標を見直している。担当者会議や面接時に聞いた家族の意見も反映している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の食事や排せつの記録、生活の中で本人の言葉や職員の気づきを記録し、心身の状態や気分の変動の把握に努め、情報を共有し、実践に活かしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人・家族の状況や要望に応じて、通院や買い物等、必要な支援は行っているが、コロナ禍の為少なくなっている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在は地域の方々の行事への参加は中止しているが、市が発行している広報誌を見たりしながら、地域の情報を伝え、楽しむことができるようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族が希望するかかりつけ医となっている。基本的には職員と共に家族同行の受診となっているが、家族の都合の悪い時は職員が代行してる。受診が困難な方は訪問診療を行っている。	入居時の話し合いで利用者と家族が希望する主治医としている。主治医には月2回の訪問診療を受け、24時間対応も可能である。看護師は週2日勤務し健康チェックする事で安心の医療支援が出来ている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	その日の顔つき、気分、行動の状態、バイタル、排泄表、食事量などにより日々身体の異変をチェックしている。また内出血、傷、等は入浴時や着替えの時等に気を付けている。異変がみられた時はその日の職員と確認し合い医師に伝え処置している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は、苑での支援方法等の情報を医療機関に提供している。また、医療関係者や家族と早期退院に向けての情報交換を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合の対応については、入居時に説明を行っている。早い段階での本人や家族の意思確認は行っていない。主治医よりそのような状態であると告げられた時点で、家族・主治医と今後の方針について話し合いを行っている。	契約時に「終末期及び急変時の対応について」の指針を家族に説明している。重度化した時には、関係者全員で話し合い、理解の上看取り支援に取り組んでいる。職員研修も終了しており方針を共有して前向きに取り組んでいる。昨年1名の看取りをした。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変に備え、心肺蘇生等のやり方をAEDを用いて内部研修を行っている。皮下出血から表皮剥離の二次被害にならないようガーゼで保護を行っている。また全員が対応出来るよう指導している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災や地震を想定した防災訓練を定期的に行っている。地域の方々の協力が得られるよう運営推進会議で働きかけている。また、BCPの内容等、職員への意識づけを行っている。	年2回の避難訓練を実施。水害、火災、地震に備えた訓練を昼、夜を想定して実施した。コロナ禍で地域住民と一緒に訓練は出来ていない。緊急時に地域一帯にマイク放送がある。大雨や台風時には防災隊が出る事になっており、自治会に「避難する」と連絡する事で協力を得る事ができる。	昼夜を通して様々な災害の発生を想定し、日々の防災意識を高める為、災害発生時の初期動作が出来るように、机上訓練を含め定期的に訓練を実施される事と、災害時に備えて食料等を備蓄されることが望まれる。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの性格やプライドに配慮し、本人を傷つけてしまわないように言葉かけや対応に配慮している。	社内研修でプライバシー保護について学び職員の人格尊重への意識は高い。フロアでは、利用者を尊重している姿勢が見受けられた。日々の記録等は、利用者の目の触れない様に保管している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員から押し付けるようなことはせず、いくつかの選択肢から自己決定できるような言葉かけを意識して支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日課を作らず、その日の入居者の体調や気分に合わせて対応し、なるべく個性のある支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類などは自分で選べる方は、自分で選んでもらっている。自己決定が難しい方は2択で選んでもらったり、職員と一緒に、季候や好みなどを考慮して選んでいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人ひとりの好きな物や食べたい物を聞いたり、普段の会話や様子等から伺い、誕生日にお祝いを兼ねて、楽しめるようにしている。	ご飯とお汁は事業所で準備し、その他の食材は、委託業者から調理済みの料理を取り寄せて、利用者の好みに調整したものを盛り付けている。誕生日には利用者の好みに合わせてメニューを決めている。あと片付けや下膳は利用者が出来る範囲で行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士が作成した献立表をもとに、一人ひとりの嚥下量や咀嚼力を考慮し食事形態を工夫して提供している。また、いつでも気軽に水分摂取ができるようにお茶が用意されている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自立している方には食後に歯磨きの声掛けを行っている。見守りで歯磨きが出来た方は、その人の能力により出来ない所は手伝い、見守りを行っている。介助が必要な方については、本人に確認をしながら口腔ケアを行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンやポイントが把握できるように努めている。尿意のない方には、時間を見計らって声をかけ、羞恥心に配慮したトイレ誘導を行っている。	排泄記録表で一人ひとりの排泄パターンを把握し、利用者個々にあった支援を心がけ、立位不安定な利用者もトイレで排泄できるようになった事例がある。日中は全員がトイレでの排泄を行うなど自立に向けた支援に力を入れている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	入居者の排泄状況を記録により把握することで、身体を動かす機会を作ったり、食事を工夫するなど、なるべく自然排便できるよう便秘の予防に取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴する順番などは決めず、その日に入浴するのか希望を取り、入浴している。入浴拒否の多い方には、なるべく入浴してもらえるよう言葉かけやタイミングを工夫し、入浴してもらえるよう支援している。	一人ひとりの生活のリズムを配慮した上で、概ね週3回の入浴としている。入浴時は職員とゆったりとした会話の時間を大切に支援している。一人ひとりの希望や要望を聞き入浴を楽しむ支援をしている。ゆず湯やしょうぶ湯も取り入れて季節感を味わって貰う工夫もしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活リズムに配慮し、夜間安心して眠れるように、日中の活動を工夫している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者全員の薬名を表にまとめて、その時間に服用しなければならない薬・どの入居者がどんな薬を服用しているのかを一目で分かるようにしている。また薬が変更になった時には記録や日誌に記入し体調の変化の確認が出来るよう職員で共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者の生活歴や職歴を活かし、食事の準備や後片付けなど、一人ひとりの役割や楽しみを見つけ、活力ある生活が送れるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナのため、人が集まるような場所へは、行けていないが、自宅を見たいという要望があれば連れて行けるよう時間や日にちの調整をしている。	コロナ禍で地域の行事への参加や遠方への外出支援は出来なかったが、コロナ禍も緩和の時期を迎えた5月以降は、晴天時に近くのパークに桜を見に行った。今後は目的を持った外出支援を実施したいと思っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	少しのお金でも持っているとお心される方には、家族の協力を得て所持してもらっている。外出時は、なるべく本人の手から支払いができるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者が好きなききに電話したり、手紙のやり取りができるよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混雑をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	自由に動くことができるよう環境面に配慮し、落ち着いて過ごせるよう家具等の位置に気を付けている。入居者と一緒に季節感のあるものを作成し、掲示している。	食堂兼居間は、採光も良く明るい。テレビ、ソファ、椅子も動線を考慮して置かれ、床暖房も設置され、空調や換気も行き届き、利用者が安心して暮らせる工夫がされた空間である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂の席は、自然と決まった場所ができているが、入居者同士の関係や性格などで席替えやテーブルの配置替えを行い、入居者同士の関係に配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	衣類など自分で選べる方は、自分で選んで頂いている。自己決定が難しい方は2択で選んでもらったり、職員と一緒に、季節や好みなどを考慮して選んでいる。床暖房も各自室に設備されている。	広くて換気も行き届き、清潔な空間である。各自が使い慣れた家具を持ち込み、安心した生活ができるような工夫がされている。洗面台も設備され自分らしい生活ができるような工夫がされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室ドアには名前が書いてある紙を貼って、誰の居室かわかるようにしている。また本人の出来る事を奪わないよう本人が使う物は本人の手の届く場所に置いている。		